

『ドンビー父子』——ドンビーの人間復帰

大森幸享

SYNOPSIS

Dombey's fall is connected with alienation from his family and all that is kind-hearted and emotional. In *Dombey and Son*, Dombey gradually and tragically deepens his solitude. In delineating Dombey's fall, Dickens does not dichotomize punishment and reward. He sustains his conviction that Dombey is not evil but that his moral deviation and judgment are to be blamed. Dombey's heartless nature rejects homeliness and human sympathy as incompatibles, and represses them under his consciousness. In consequence, the unacceptable feelings threaten him. It is when Dombey regains homeliness that his pride opposes to his human nature, and that his complicated mind surfaces from his unconsciousness. Therefore the central concern in his novel is to probe into the mind of Dombey and see where the real problem lies. In this paper, Dombey's inner struggles are traced so as to find the cause of his fall and the way how he recovers his homeliness and warm-hearted personality.

1. 序論—判断の誤りによる道徳的逸脱

『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)は、19世紀イギリスの新興産業社会のなかに生じた拝金主義を非難し、会社を経営するドンビー(Dombey)の没落の原因を人間性と家庭性の欠如に見ようとする物語である。ドンビーの没落は家族の離反と連動して進み、次第に孤独な存在になってゆく悲劇の主人公の姿を描き出す。しかしながら、物語の結末における心理的現実に着目する Arlene M. Jackson も指摘しているように、ドンビーの結末は「罰と報いがそれほど容易に、あるいは明確に二分されてはいない。」¹ その根底には、ドンビーの行為を悪と見なすのではなく、判断の誤りによる道徳的逸脱としてとらえ、悔恨と和解とによって家庭性を回復したドンビーは許され得るのだとするディケンズの信念があるように思える。

ドンビーは、カーカー(Carker)やバグストック(Bagstock)のような邪な人間世界には属さないが、とはいえポール(Paul)やフロレンス(Florence)の愛情の世界にも属さず、陰鬱で暗い世界にひとり閉じ込められた存在である。道徳的逸脱へとドンビーを駆り立てるもの、そして彼と家族をさえぎるものは、家族関係も経済的必要性によって統合された他人同士の集団であるかのようにみなす彼の非情な考えに他ならない。つまり、家庭性の回復にこそドンビーの人間復帰の兆しがある。このように考えてくると、『ドンビー父子』では、機械的で冷酷なドンビーとは裏腹に、彼の発言や思い、そして行動の中に、その微妙な心の揺れを読み取ることができるのではないだろうか。また、

物語は自殺しようとするドンビーがフロレンスによって救済される場面でほぼ完結をむかえているが、彼の没落から救済までをひとつの流れとしてとらえたならば、判断の誤りに気づき人間復帰するに至るドンビーの精神世界をより明確にとらえることができるのではないだろうか。本論では、ドンビーの心の奥底で揺れ動く・藤を浮き彫りにし、いかにしてドンビーが家庭性を回復し、人間復帰するかを明らかにしていきたい。

2. ドンビーの失墜とその原因

ドンビーの内面を分析する際に重要となるのは、彼の家族観である。3章に見られるフィズ(‘Phiz,’ H. K. Browne, 1815-82)の挿絵‘The Dombey Family’に着目してみると、フロレンスは家族の集合肖像画の枠から外れ、彼女がドンビー家でどのように扱われているかを象徴的に示している。その挿絵の中央では、ドンビーが椅子に座り、左側には、ポールを抱いた乳母ポリー(Polly)が気まずい表情で立ち、右側の扉ではフロレンスが躊躇しながらもどかしげに手をねじり、父親の方へと悲哀に満ちた視線を送っている。この挿絵のアレゴリーによって、主人公であるドンビーの人間像を読者に対して視覚的に強く印象づけることが意図されている。つまり、この挿絵がドンビーの家族観を体現している。

ドンビーの価値基準に従えば、ドンビー父子商会の存続と発展において、ポールは重要な跡取り息子であり、会社が名実ともに“Dombey and Son”となるための不可欠な存在である。一方、フロレンスはポールの次に寵愛される存在となることもなく、価値のない“merely a piece of base coin”²とみなされる。ドンビーの家族に対する価値基準は、資本として価値があるかないかにある。したがって、彼がフロレンスを疎外する理由は、フロレンスが会社の跡継ぎになれない娘だからである。

親子の共同経営を実現するために、ドンビーはポールの幼児期を奪う。物語の早い段階でポールは死んでしまうが、その原因はドンビーがポールの生命時計を早め、時間的秩序をゆがめたからである。確かに、ドンビーはポールを寵愛した。しかし、それは“infant”(90)や“boy”(90)としてではなく、“a grown man”(90)や“the ‘Son’ of the Firm”(90)として寵愛したにすぎない。ドンビーは、6歳のポールが16歳であったらと途方もないことをピプチン夫人(Mrs Pipchin)に述べ、ポールが他の同年代の子どもたちよりも勉強が遅れているのではないかと心配する。そして環境が何もかもを左右するのだと断言し、ポールの教育方針を次のように述べる。

‘ . . . Now, Mrs Pipchin, instead of being behind his peers, my son ought to be before them; far before them. There is an eminence ready for him to mount upon. There is nothing of chance or doubt in the course before my son. His way in life was clear and prepared, and

marked out before he existed. The education of such a young gentleman must not be delayed. It must not be left imperfect. It must be very steadily and seriously undertaken, Mrs Pipchin.’ (137)

ポールの将来は約束された人生というよりも、束縛された人生といえる。なぜなら、ポール自身が望まないものを強制されるからである。ポールはフロレンスと引き離され、プリンパー博士の寄宿学校へ送られる。プリンパー学校では、機械的で詰め込み式の、子どもの想像力と子どもらしさを奪うような不適切な教育を受け、ポールはますます“old-fashioned”になる。ドンビーは、ピプチン夫人の教育方法のように、ポールに彼の好きなものを与えず、嫌いなものを与えている。

母親が死に、乳母が解雇された今となっては、ポールに残された愛情と安らぎの世界はフロレンスとの間にしか見出されない。ドンビーは、ポールとフロレンスとの結びつきが強いということ以上に、ふたりから“Shut out”(30)されることを恐れる。ドンビーは、ファニー(Fanny)とフロレンスとの関係に対して感じた孤立感を忘れることができない。次第に膨らむフロレンスの存在感によって、ドンビーの彼女に対する意識は強まる：“his previous feelings of indifference towards little Florence changed into an uneasiness of an extraordinary kind”(30-1)。これはドンビーがフロレンスを制御できないと気づいた印象的な場面といえる。ディケンズが 1858 年版の序文のなかで、「ドンビーは、内面の急激な変化を起こしたわけではない」³と述べたことを文字通りに解釈すれば、ドンビーのフロレンスに対する感情の変化を心の揺れと解釈することができよう。ポールが幸せを感じることでできる唯一無二の世界をドンビー自身がさえぎろうとするのは、ドンビーの意識の中でフロレンスの存在が無視できないものとなったことを表している。したがって、ドンビーがポールを寄宿学校に入れることによって、フロレンスから引き離そうとしたことは重要な点である。すべてを自分の所有物と考えるドンビーが支配できないものこそ、フロレンスの感化力である。ポリーは、“Nothing could be better than Miss Florence”(30)とドンビーに言い、ポールにはフロレンスが不可欠であることを疑わない。同様に、ポールをピプチン夫人のもとへ預ける際に、ルイーザは、“I don’t think you could send the child anywhere at present without Florence”(98)とドンビーに言う。ドンビーはフロレンスを軽視する一方で、実際に疎外されているのは自分なのではないかと感じはじめる。疎外感が危機感を生み、フロレンスに対する嫉妬心は、いまや憎悪へと変わろうとする。ドンビーがフロレンスとポールとの結びつきを断ち切ることは、フロレンスの影響力を弱めようとする行為といえる。

ドンビーの家族観は、冷淡な経営者のそれとして描き出される。家庭の領域が会社とビジネスによって侵食されてしまっており、それはとりもなおさず誇張されたヴィクトリア朝社会の姿を映し出す。Andrew Elfenbein が指摘するように、「ドンビーの住

居は、典型的なヴィクトリア朝の家庭ではなく、会社のように営まれた結果、崩壊した家庭」である。⁴ ドンビーの家庭内には、父権と家父長制と会社組織が歪な形で混同している。たとえば、ドンビーが妻イーディス(Edith)に期待するものは、抑圧的なものとなる。

‘I am sorry, madam,’ said Mr Dombey, ‘that you should not have thought it your duty—’
She looked at him again.

‘Your duty, madam,’ pursued Mr Dombey, ‘to have received my friends with a little more deference. Some of those whom you have been pleased to slight to-night in a very marked manner, Mrs Dombey, confer a distinction upon you, I must tell you, in any visit they pay you.’ (500)

ドンビーは、イーディスに会社組織を形成するメンバーのひとりとしての義務の遂行を強いる。彼が彼女に期待したものは愛情ではなく、会社の一員として、さらにはドンビー父子商会の経営者ドンビーの妻としての義務を果たす人格を求める。

He had imagined that the proud character of his second wife would have been added to his own—would have merged into it, and exalted his greatness. He had pictured himself haughtier than ever, with Edith’s haughtiness subservient to his. He had never entertained the possibility of its arraying itself against him. (540)

ドンビーが自我を実現しようとするとき、彼女は鼻持ちならぬ高慢さをさらけ出す。結婚以来、ただドンビーの偉大さを引き立てる役目を背負わされたイーディスは、有無を言わず家父長制と会社組織の構図に組み込まれる。

ところが、イーディスは計略的な結婚の駒に使われたことに憤慨すると同時に、そうした自らの運命を嘆く女性である。彼女がドンビーを軽蔑する理由は、自分がお金で買われたという事実からである。ドンビーと同様にプライドの高いイーディスは、ドンビーの支配に対して毅然と立ち向かい、彼の思い通りになりはしないことを態度で明白に示す。42章でドンビーが落馬し傷を負って帰宅したときに、イーディスは心痛めることもなく、また彼に一言の遺憾の意を表すこともない。Elfenbein が指摘するように、「ドンビーが落馬する場面は、彼がイーディスを制御できない、効果的なシンボル」となっている。⁵

自分自身の偉大さに包まれているドンビーは、イーディスの心をつかむことができない。それどころか、ドンビーは、敵対心をもち反抗的なイーディスに対して一歩も退かず、彼女に屈しまいと対抗する。イーディスがドンビーの期待を裏切るたびに、ふたりの関係も緊迫する。

‘Madam,’ said Mr Dombey, with his most offensive air of state, ‘I have made you my wife. You bear my name. You are associated with my position and my reputation. I will not say that the world in general may be disposed to think you honoured by that association; but I will say that I am accustomed to “insist,” to my connexions and dependents.’ (543)

ドンビーがイーディスを制御するためには、彼女を会社組織の一員とみなし、義務と命令を押し付ける以外にない。

しかし、ドンビーは家族を思うままに支配することはできない。彼の金銭主義が、フロレンスの感化力やイーディスの傲慢さを支配することはできない。作品は、フロレンスとイーディスの親密な関係が、ドンビーの家族観を脅かすという構図をとる。そこには、金銭で幸せは買えないのだとするディケンズの信念があるように思われる。ドンビーは、そのフロレンスとイーディスの関係からも閉め出され、家父長制を脅かすものがフロレンスであることに気づくと、フロレンスを徐々に強く意識するようになる。そしてその感情は、彼のプライドゆえに愛情を嫉妬心と憎しみとによって置き換えてしまう。

3. 家庭性の回復とドンビーの救済

ドンビーを没落から救済するのは、家庭性を失わないフロレンスの献身的な愛情である。ディケンズは、ドンビーを通して教訓的な物語を展開し、金銭崇拜を克服した愛情の勝利で結論づける。ドンビーが救済される人間でありえるのは、物語を通して、その描写の中に人間性の片鱗が見えるからである。

フィズによって描かれた『ドンビー父子』の月刊分冊の表紙には、ドンビーの出世、没落、そして救済の半生が時計回りに描かれている。Barbara Weiss はディケンズが考案したこの挿絵について、「回転する運命の車輪を印象的に描こうとしている」と述べている。⁶ その挿絵の左下では日の出を背景に、“ledger”を軽々と支えている自信溢れるドンビーの姿があり、その上方では“cash box”が積み上げられ、頂上で三重鍵の頑丈な“cash box”の上の玉座にドンビーが尊大な態度で座っている。そして、右方では、積み上げられたトランプが今にも崩れそうにドンビー邸を支え、その下方では日暮れと難破船を背景に、杖をついたドンビーが錢袋に押しつぶされながら邸を支えている。そして最後に左方にはフロレンスに支えられながら弱々しく歩く白髪のドンビーが描かれている。ディケンズが、ドンビーの没落から救済までを念頭においていたことは明らかである。

ドンビーの心に・藤が生じ、人間性の片鱗を見せるときに、彼の意識の中で共通す

るものは、フロレンスの存在である。レミントン(Leamington)に向かう汽車の中で、ドンビーはフロレンスの顔を思い浮かべる。彼は自分が嫌悪し、拒絶してきたものが実は自分の無意識の世界に充満していることを知らされ、それを意識の中に同化することができずに苦しむ。たしかに、ドンビーはフロレンスの“sweet, calm, gentle presence”(275)と、“loving and innocent face”(275)、それから“patience, goodness, youth, devotion, love”(275)を歓迎せず、拒絶し、娘への愛情が自分のなかに現れるはずがないと信じている。しかしながら、嫌悪感を抱いているとは語られない。それまでフロレンスを完全に否定してきたドンビーは、心の奥底にフロレンスを否定できない自分がいることに気づき、フロレンスへの思いが膨れ上がり、無意識から意識の上へと上がってくることを恐れ戸惑う。そして、彼はフロレンスを拒絶することによって、彼女を肯定する気持ちを否定しようとする。このとき、フロレンスの感化力は、ドンビーにも影響していると考えられる。

35章で、ドンビーのフロレンスに対する否定的な感情が和らぐ場面も、フロレンスの感化力の影響といえる。眠った振りをしたドンビーは、針仕事をしているフロレンスをハンカチごしに観察し、フロレンスに対して温かい気持ちを抱く。

But as he looked, he softened to her, more and more. As he looked, she became blended with the child he had loved, and he could hardly separate the two. As he looked, he saw her for an instant by a clearer and a brighter light, not bending over that child's pillow as his rival—monstrous thought—but as the spirit of his home, and in the action tending himself no less, as he sat once more with his bowed-down head upon his hand at the foot of the little bed. He felt inclined to speak to her, and call her to him. (485)

ドンビーの意識の中に、肯定されたフロレンスがいることが分かる。ここにドンビーの人間性の片鱗をみることができる。

さらに、自らの過ちに気づいたドンビーがまるで罪を贖うようにフロレンスを求める精神世界は、それまでの俗物的なドンビーとは対照的に、人間性が解き放たれた姿がある。会社が倒産してもなおプライドを持ち続けたドンビーは書斎へ閉じこもり、回想の中に膨れ上がるフロレンスの姿が彼を苦しめる。たとえ親切な人が手を差し伸べ、優しく接してくれたとしても、ドンビーは背を向け、孤独の殻のなかに閉じこもるのだ、と作者は語る。無意識下に抑圧されていたフロレンスへの愛情が意識化しようとする、その感情を否定しようとするプライドがドンビーに歯止めをかける。ところが、自我がプライドを支配したとき、ドンビーは孤独と悲惨さの中で、かつてフロレンスが父親の愛情を求めて降りていった階段を、後悔と懺悔の気持ちでゆっくりと上がってゆく。階段に残されたフロレンスの数え切れないほどの足跡を目にし、ドンビーはいかに自分が無知で不幸な人間なのかを知り、後悔の涙を流す。このとき、

彼の無意識に抑圧された直視しがたいフロレンスへの愛情が表面化する。無意識なものや非合理的なものを抑圧し、自我によって得てきた富と名誉を失ったとき、ドンビーははるかに貴い人間性や家庭性を失ったことに気づく。

ドンビーの心の中で、フロレンスを求めようとする気持ちと、プライドを捨てまいとする気持ちとが闘ぎ合う。たしかに、ドンビーの心の中は激しく揺らいでいるが、その気持ちを表に出さない限り、ドンビーとフロレンスとの関係は進展するはずはない。言い換えれば、表面的にはドンビーとフロレンスとの関係は、はじめから変わってはいない。それを明白に表しているのは、‘Let him remember it in that room, years to come!’と銘打った59章の挿絵である。Q. D. Leavisが、その59章の挿絵と3章の挿絵‘The Dombey Family’とを比較して指摘するように、「フロレンスは‘The Dombey Family’の挿絵と同じような関係で、ドンビーを振り返って立っている。しかし、体はドンビーの反対を向き、まさに彼を置き去りにして出ていこうとしているとドンビーは思う。」⁷ただ、ドンビーがフロレンスに背を向けている理由は、‘The Dombey Family’とは異なり、無関心で背を向けているのではなく、フロレンスに会わせる顔がないからである。もはやフロレンスを直視しないのではなく、直視できないまでに、ドンビーの意識の中でフロレンスの存在感が膨れ上がっている。また、その2枚の挿絵は、ドンビーの家族観の原因と結果を示していると考えられる。彼が心を開き、フロレンスの愛情を受け入れない限り、和解もドンビーの救済もありえない。‘Let him remember it in that room, years to come!’のなかで、ドンビーの書斎に差し込まれる光“a gleam of light; a ray of sun”(808)は、フロレンスの変わらぬ愛情の象徴と考えられる。それはまぎれもなく、孤独の書斎に巣くっていた陰鬱な闇から、ドンビーを出口へと導く希望の光である。狂わしいまでの自殺願望と自問自答するドンビーは、その光に心を留めない。そして、鏡の向こうに見える自分の疲憊しきった姿をおぼろげに見ながら、ドンビーは自殺する自分の姿を思い浮かべる。

しかし、ドンビーの“guilty hand”(808)が示すように、ディケンズは、ドンビーの自殺を罪とみなしている。自殺は神との訣別を意味する罪に問われる行為であり、自殺によって一切の苦しみを放棄した者は真の救済を得ることができない。ドンビーは罪滅ぼしのために死のうとしているのではない。むしろ、意識化したフロレンスへの愛情と、これまでの娘との関係に感じる劣等感とが競合し、後者が極端に強くなった結果、死を選ぼうとしているのである。つまり、自ら築いたフロレンスとの間の厚い壁を取り壊すのではなく、さらに壁を厚くして閉じこもろうとする。フロレンスは、ドンビーの側にある越えられない壁の向こうから父親の愛情を求め続けた。繰り返される“unchanged”という言葉が、あきらめずにドンビーの心が自分の方に向く日を願い続けたフロレンスの愛情の確かさを強調する。哀れにも父親から疎外された幼少期の寂しさと、父親に打たれて家を出た悲しみによって、父親との関係に絶望する瞬間もあったが、その深い愛情ゆえに父親を見捨てることはなかった。その確かなフロレンスの

愛情を知り、ドンビーは赦しを請いながらしがみつくとフロレンスに愛情で応える。想像ではなく、現実のフロレンスに会うことがドンビーの人間復帰を可能にしたといえる。ドンビーは、フロレンスに口づけすると上を見上げ、神に赦しを請う：“Oh my God, forgive me, for I need it very much!” (810) この単純にして率直な言葉は、人間性を取り戻したドンビーの心を示している。

4. 結論—罰と報いのパラドクス

ドンビーの家庭性の回復と救済が、彼の老齢化という時間的解決によってなされたことは否定できない。会社が倒産した後、書齋に閉じこもる60歳を越えたドンビーはやつれ衰え、罪の意識にさいなまれて精神衰弱に陥っている。⁸ 倒産によってすべてを失ったドンビーは、過去を振り返ることができ、結婚して母となったフロレンスを受け入れることができる。ディケンズは作品の中で、罰がなければ報いはありえないと主張しているわけである。一見、パラドクスのように見えるドンビーの結末において、倒産を罰とみなし、家庭性の回復、つまりフロレンスとの和解を報いとする、倒産が起これなければフロレンスとの和解もないということになる。そのように考えれば、ドンビーの没落さえも肯定的なものとなり、ドンビーが人間復帰するために必要不可欠な出来事であるといえる。

しかし、フロレンスとの和解において、ドンビーの元へ戻ってきたフロレンスが、彼よりも先に赦しを請うことは注目すべきである。フロレンスはドンビーの足元にひざまずき、置き去りにしたことを詫びる：“Raising the same face to his, as on that miserable night. Asking *his* forgiveness!”(808) フロレンスがドンビーを赦すのではなく、フロレンスが父親の赦しを求めるところに、ふたりの関係が容易に解消されるものではないことを物語る。事実、長い年月を要して、ドンビーはフロレンスの家庭で心の傷を癒す。

この作品では、フロレンスが貫いた不変の愛情を尊ぶ精神と、ドンビーの判断の誤りを赦す寛大な心を追求している。フロレンスが不変の愛情でドンビーを求める限り、ドンビーが人間性を取り戻す機会を失うことはない。たとえ社会的成功を収めようとも、“greatness”に心を奪われ、思いやりや愛情を忘れて、富と名誉を求める姿に人間的墮落を見る。それは、ドンビーの家庭レベルの領域にとどまらず、拝金主義が高まったヴィクトリア朝社会全体にひろがるテーマとなっている。産業の発展に関してむしろ急進派であったディケンズは、人間性を犠牲にした産業発展を否定し、家庭性と愛情に支えられた社会を実現すべきであると訴えている。

注

本稿は、第 18 回甲南英文学会研究発表(2002 年 7 月 6 日 於甲南大学)における口頭発表の草稿を加筆修正したものである。

- 1 Arlene Jackson. "Reward, punishment, and the conclusion of *Dombey and Son*." *Dickens Studies Annual* 7 (1978), 105.
- 2 Valerie Purton, ed., Charles Dickens, *Dombey and Son* (London: J. M. Dent, 1997) 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 3 Preface to the First Cheap Edition Reprinted in 1858. xli.
- 4 Andrew Elfenbein. "Managing the House in *Dombey and Son*: Dickens and the Use of Analogy." *Studies in Philology* 92 (1995), 375.
- 5 Arlene Jackson. 110-1.
- 6 Barbara Weiss. *The Hell of the English: Bankruptcy and the Victorian Novel* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1986), 17.
- 7 Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. (Harmondsworth: Penguin Books, 1972), 453.
- 8 ドンビーの年齢に関しては、T. W. Hill の "Dombey Notes" *Dickensian* 39 (1942) を参照。

参考文献

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. London: W. W. Norton & Company, Inc, 1973.
- Elfenbein, Andrew. "Managing the House in *Dombey and Son*: Dickens and the Use of Analogy." *Studies in Philology* 92, 1995.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. New York: New York University Press, 1971.
- Hill, T. W. "Dombey Notes." *Dickensian* 39, 1942.
- Howard, David, John Lucas, and John Goode, eds. *Tradition and Tolerance in Nineteenth-Century Fiction: Critical Essays on Some English and American Novels*. London: Routledge & K. Paul, 1966.
- Jackson, Arlene. "Reward, punishment, and the conclusion of *Dombey and Son*." *Dickens Studies Annual* 7, 1978.
- Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.
- Lerner, Laurene, *The Victorians*. New York: Holmes & Meier Publisher, 1978.
- Marcus, Steven. *Dickens from Pickwick to Dombey*. Simon and Schuster, 1965.
- Steig, Michael. *Dickens and Phiz*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.
- Teisedou, Janie, ed. *Politics in Literature in the Nineteenth Century*. Lille: Université de Lille III, 1974.
- Weiss, Barbara. *The Hell of the English: Bankruptcy and the Victorian Novel*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1986.
- アングス・ウィルソン, 松村昌家訳 『ディケンズの世界』東京: 英宝社, 1979 年 .
- 西條隆雄 『ディケンズの文学—小説と社会—』東京: 英宝社, 1998 年 .
- 松村昌家 『ディケンズの小説とその時代』東京: 研究社, 1989 年 .

出典: 『甲南英文学』第 18 号(甲南英文学会, 2003) 1-10.